

われわれの歩んだ道—— 社労同～青共委8年史

目 次

1. 61年分裂と綱領反対派の混迷
2. 社労同の結成と展開
3. 共青から共学同へ・苦闘の時代
4. 70年闘争の敗北と社労同の崩壊
5. 社労同分派闘争と青共委3年

青年共産主義者委員会

はじめに

(青年共産主義者委員会機関紙『曙光』)
83号、「連載にあたつて」より

世界政治の共存的再編成の進行と対決し翻る、抜いている全ての労働者・学生諸君、読者諸君、われが青年共産主義者委員会は、来春に予定される第六回総会に向け、本格的政治組織建設の準備を着々と進めている。この夏の合宿において、われわれは初めて組織建設の具体的計画と組織活動の方について検討することができた。

この組織建設の重要な一側面として、階級闘争の歴史を紹介していくことにした。われわれの組織は、前身である社労同の闘争の戦列に加えていく任務がある。現下の階級闘争の後退局面において、この任務は困難なものである。とりわけ、カンパニア主義的傾向の強い新左翼においては、後退局面の影響は深刻なものがある。さらに党建設に対する消極的意識は広汎な主体を抱えており、二重、三重の困難のなかにこの任務はある。

われわれ青共委は、闘う主体を構築的にかちとり、階級闘争の歴史を継承し、同時に若い世代を階級闘争の戦列に加えていく任務がある。現下の階級闘争の後退局面において、この任務は困難なものである。とりわけ、カンパニア主義的傾向の強い新左翼においては、後退局面の影響は深刻なものがある。さらに党建設に対する消極的意識は広汎な主体を抱えており、二重、三重の困難のなかにこの任

務はある。

学労論争・社労同論争から社労同の崩壊

この作業は、『曙光』(8月号より)連載の予定であるが、その内容は以下のようになっている。

（1）共産主義者の結集問題と社革

（2）社労同の結成から第三回総会の結成

（3）新左翼として登場

（4）共青から共労同、国際反戦大會と八派統一戦線

（5）社労同共産主義委員会から青共委の結成、現在

まだ、この連載とは別に、日本共産主義運動の歴史、われわれに崩壊—歴史の中斷—を強制し

たし、同時に階級戦線のあり方を大きく変質させていく。こうした状況にあっては、社労同から青共委への変転も一般的の認識を得得するには困難であり、この作業も意

味はある。

われわれ青共委は、闘う主体を構築的にかちとり、階級闘争の歴史を継承し、同時に若い世代を階級闘争の戦列に加えていく任務がある。現下の階級闘争の後退局面において、この任務は困難なものである。とりわけ、カンパニア主義的傾向の強い新左翼においては、後退局面の影響は深刻なものがある。さらに党建設に対する消極的意識は広汎な主体を抱えており、二重、三重の困難のなかにこの任

われわれの歩んだ道——社労同・青共委8年史——(1)

六一年分裂と綱領反対派の混迷

社会主義革命派

よく知られているように、五一
年分裂、日共六回大会が、アメ

リカ軍の占領下にもかかわらず、
議会を通じての和平革命が可能で

あるとしたことに対し、コモン
フォルムが激烈に批判したこと

端を発した。このとき内容にでは

さまつたのが宮本頤治ら国际派の

派が比較的多かつたが、コマン

う。とにかく、少数派とはいえ七

らば、大槻“社会主義革命派”と

なく、国际友党としての批判の仕方に反発した所感派（主流派）は同年六月マッカーサーの中央委員会、幹部追放の強圧と、続いて起

った朝鮮戦争を機に、勝手に地下に潜行して、少数派の国际派を排除しつつ、なじくすし的に路線転換を行い、ついには極左冒険主義の五年綱領にまで至った。この五年綱領は明らかにモスクワ製であった。

ところが、朝鮮戦争はスターリンの思惑をはすれて、はかばかしくなく、ついには中国の血の代償をもって収束した。ここにアジアにおける共産主義運動の主導権は中国共产党がもぎとり、スターリンの死を経て、五六年七月北京製の六全協で自共は一応の統一を見た。そのとき新主流派の増加によ

り、国际派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

日共七・八回大会

その時期に、理論的には未だ素朴なアロレタリア國際主義的原则の感を出していた社会主義革命派は、五六ソ連共产党第三回大会でのスターリン批判をへて、イタリア共产党により上昇された一社会主義へのオタリアの

革命を國際格威主義でやり始めたコマンドール批判に対し、批判の受け入れ形式をめぐって、所感派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

道に触発された構造改革論者こむすびつき、宮本の主流派の民族解放・民主主義革命を主張とする共产党案に鋭く対立する戦略的差異を意識化した「戦略反対派」として形成されるに至った。

第七回大会以後、社会主義革命派が一時期持つた押せ押せ的範囲は、何故生じたか。一口でいえば、これがむきだしで、細胞組織

党章草案自体は、第七回大会では保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

う。とにかく、少数派とはいえ七年以上の党中央部を擁し、都委員会の多数派を占め、大教組などもともと一度し難い民族・民主革命を国际格威主義でやり始めたコマンドール批判に対し、批判の受け入れ形式をめぐって、所感派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

う。とにかく、少数派とはいえ七年以上の党中央部を擁し、都委員会の多数派を占め、大教組などもともと一度し難い民族・民主革命を国际格威主義でやり始めたコマンドール批判に対し、批判の受け入れ形式をめぐって、所感派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

う。とにかく、少数派とはいえ七年以上の党中央部を擁し、都委員会の多数派を占め、大教組などもともと一度し難い民族・民主革命を国际格威主義でやり始めたコマンドール批判に対し、批判の受け入れ形式をめぐって、所感派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

う。とにかく、少数派とはいえ七年以上の党中央部を擁し、都委員会の多数派を占め、大教組などもともと一度し難い民族・民主革命を国际格威主義でやり始めたコマンドール批判に対し、批判の受け入れ形式をめぐって、所感派と国際派に割れたが、内容的には、「五〇年徳田デーヴ」論争にみられるように、徳田トロイカ論につた所感派プラス宮本・辻田などのブルジョア民主主義革命派と、神山氏らの植民地革命派、春日庄次郎・中西功氏らの社会主義

第八回大会にいたるごく短期間の内民主主義と自由な討論の力八春秋の第七回大会から六一年の国際派の全学連グループの一部は、五八年秋の第七回大会直前、いわゆる六・一事件で党と訣別し、後にトロツキズムからの影響を多少受けて、「原原理対派」といわれる六・一事件で党と訣別した。

ところが、三年を経ずして開催された六一年の第八回大会は、主流派の圧勝となり、廣場一斉で民族・民主革命綱領は採択された。社会主義革命派は、党大会を待たずして、統制監査委員長春日庄次郎氏の離党声明と、続々中央委員の同調に象徴され、負大集団は保留され、採択されなかつた。

一説によれば、当時、民族・民主革命を主張する主流派と社会主義革命を主張する反主流派との勢力比は、およそ二対三であったとい

「ゼンセン」として探究され、較
主張打撃の方向・同盟軍を肯定す
ればそれで事足りりとする傾向が
ほとんどである。だが、求められて
いたのは、このレベルから、社会
主義への革命過程論、移行形態
論、そのための運動論、政黨論を
下から主体的に組みあげる努力で
あった。第二に、めざさるべき
社会主義とけなに、「権力運営
型」「生産力型」「小市民幸福
型」などの俗流社会主義と対決
し、「一般民主主義の徹底のなか
で、社会主義をなによりも疎外か

らの人の間の回復、自由一自治の完
全な実現と考える習慣を定着させ
る努力が必要であった。第三に、
構造改革という要素を民主主義・
社会主義革命の全体の論理と、そ
れを推進する主体形成の論理から
切り離して、民主主義的介入一般
の可能性を容易に強調、拡大解釈
し、社会党構革派と右よりに結び
ついたり、ついには「構造改革主
義」のイデオロギーにまで自己目
標化してしまった「日本型構革
論」に対するきびしい批判的検討
が必要であった。

その一つは、日共の中共依存に
対抗して、みずからを國際総路線
という美名でソ連派的多数派にて
く寄せようとした「國際正統派結
党」グループで、旧中央委員会
を一部含んでいた。

その二は、結党派や構革派など
もにナンセンスとして、現在必勝
などとは反体制運動内部の反官僚
主義、民主主義の徹底化であり、
共産主義者の思想確立運動である
とする「反官僚主義」派グループ、
で、旧都委員の一部を含んでい
た。そこは、民主主義革新・構革
派の活動のなかにマルクス・リ
ン主義の指導性を打ち立てるた
めに協力すること。(三)ひらく革新
的分子を結集し、革新戦線の統一
を促進するために力をつくすこと
(四)日本の内外情勢、大衆運動
の諸経験を分析し、社会主義への
日本の道を明らかにするととも
に、マルクス・レーニン主義の自
由な研究の舞台をつくり、その創
造的発展をはかるために奮闘する
こと」という一心の活動目標らし
きものを持っていた。

それでも離党したグループは、
かなりの落ちこぼれを出しながら
も、「社会主義革新運動」を結成
し、議長春日庄次郎、副議長西川
彦義、山田六左衛門、事務局長内
藤知周の各氏のもとに、六一年八
月二八日から機關紙「新しい路
線」、一一月から準理論誌「新
い時代」が発行される始める。これ
が未だ統一社会主義同盟(統社
同)と組織分岐するに至らないま
での原初社革である。

原始社革は「(一)党外において党
の革新のためにたたかうこと。(二)
の革新のためにたたかうこと。(二)

大衆運動のなかにマルクス・リ
ン主義の指導性を打ち立てるた
めに協力すること。(三)ひらく革新
的分子を結集し、革新戦線の統一
を促進するために力をつくすこと
(四)日本の内外情勢、大衆運動
の諸経験を分析し、社会主義への
日本の道を明らかにするととも
に、マルクス・レーニン主義の自
由な研究の舞台をつくり、その創
造的発展をはかるために奮闘する
こと」という一心の活動目標らし
きものを持っていた。

その二は、民主主義革新・構革
派の活動のなかにマルクス・リ
ン主義の指導性を打ち立てるた
めに協力すること。(三)ひらく革新
的分子を結集し、革新戦線の統一
を促進するために力をつくすこと
(四)日本の内外情勢、大衆運動
の諸経験を分析し、社会主義への
日本の道を明らかにするととも
に、マルクス・レーニン主義の自
由な研究の舞台をつくり、その創
造的発展をはかるために奮闘する
こと」という一心の活動目標らし
きものを持っていた。

最初から異質なものをふくんで
発足した原始社革は、六二年七月
組織分裂にみまわれ、統社同が枝
わかれることになった。直接の
契機は(一)東京における共産主義青
年同盟(共青)の発足、(二)社革都
委員会の前衛党建設の方向決定、
(三)全国委員会の多数決制、
(四)内藤知周氏の多数決制、

改進の進むた指揮グループがあら
れていた。まさに「個別発生は
系統発生を繰り返す」ことになっ
たのである。日共の中共依存に
対抗して、みずからを國際総路線
という美名でソ連派的多数派にて
く寄せようとした「國際正統派結
党」グループで、旧中央委員会
を一部含んでいた。

その四は、構革派と曰されてい
たが、グラムシートリッチの兌
理論に触発され、民主主義・社会
主義革命とそれを推進する主体形
成を特殊に強調する「新しい党」
グループで、学生運動部面での全
自運活動家と青年運動部面での民
青革新委幹部を中心、一部知識
人を含んでいた。

他方、日本社会党にも、(一)「
社労同一青共委の政治動向の原
基は、まさに、この第四のグループ
に求めることができる。

開始した高度経済成長政策と労働組合運動の右翼的再編に象徴される情勢と運動の変化に対応でき、ものではなく、諸条件に即して労働運動を中心とする国民的運動の統一によって民主主義・社会主義路線を構築し、要求闘争と構造的闘争の結合を通じて社会主義へ接近する、きわめて実践の方針などはほとんど理解されなかつた。そこへもってきて「日本型構革論」が、組織的漫透と外的な政策の提供、奇をてらつた「理論の切り売り」をやり、最

も肝心な労働者党の問題は、複数の團結論などと称して放棄した。

その結果は、不毛な構革論争と無意味的な構造闘争による混乱で四年間を空費し、中間派の動搖と離反によりも中堅青年活動家の期待感と支持を失って後退してしまった。

このことは、ひとり統社同一社会党構革派の問題にとどまらず、総称構改革論の右寄りイメージと実践的挫折として、日本の革命運動史に刻印されてしまった。

「新しい党」論

統社同が去り、かなりの数の紛糾派ではあっても、党理論に「ソ連型党」と「新しい党」では論家グループを失った社革は、大

かなりの距離があり、しばらく鳴かず飛ばずの状態が続いた。その間に中ソ論争の全貌が次第に明らかになり、ハーフ国民党・声明に見られる國際統一路線なる極端は色あせたものとなった。また、ソ連を中心とする国際的多数派としてのお學付も一向に下りる気配はなかった。一方、「新しい党」理論は、グラムシ研究会などの地味な努力の漫透により、青年・学生運動の第一線にある若い世代の心を次第にとりえ、社革東京都委員会に一定の力を蓄えつあった。

「新しい党」理論は、グラムシのいう力関係のメント、階層論と、党を大衆的・指導的・知的な三つの基本要素の「算術的知識人」とみなそうとしたことに触発され、日本型小自共党であると見たのである。

そして、これを克服する道は、もはや既成の社革をそのまま名を改めて擬似一枚岩的小型自共党にするなどではなく、遠回りでも名られた志賀義雄、いだ・もも氏ら「日本の声」その他小クループとの組織合同問題であった。

(S)

社労同の結成と展開

われわれの歩んだ道——社労同・青共委8年史——(2)

総結集——社革の死滅

と社革多數派を中心として、国际的正統派いわばソ連派共産党的な組織をめざすものである。この方向は情勢の推移の中で新しい運動

八年三月の第五回全国総会において「日本のこそ」などの組織統一準備委員会に参加することを命ぜられていった。すなわち、六

いわゆる「総結集」問題というものは、日本共产党「日本のこそ」

され、日本の日共党内闘争から社

から始めて、要求闘争と日常活動

の徹底、先行にもよづいて、具体的・総合的な運動方針をねりあげ、大衆を思想的・政治的に統一する工場の党、工場を全社会の民

主主義的生活の推進センターに変えるヘゲモニー——いうなれば労働者権力——を確立する「新しい

党」の建設以外にもはや道はない

という主張に成長していく。こ

の主張が一挙に形をもって爆発し

たのが、六年年初頭より顕在化し

た、いわゆる「総結集問題」で、ソ連派として六四年に日共より除

名された志賀義雄、いだ・もも氏ら「日本の声」その他小クループとの組織合同問題であった。

五、反対一七、課題一で採択して総結集の方向を定めたのである。しかしこの構成による事態の進展は、社革の分裂・解体の危機を公然化するものであった。

これに対して「総結集反対派」の中心は東京で、この全国大会の前に開かれた東京都総会では、「社革東京都臨時総会は、出席者の多数をもって今回の『総結集』を延期するよう全国総会に強く要望する」という決議を六二対一三で可決していた。しかし七月には全軍指導部による社革東京の「総結集反対派」の事実上の除名処分が施行され、そこには社革五年の主張的総括はなく、いわば日本に対する戦術的反対派でもない、連れてきたランナー「日本のこと」の革新があたかも自己の政治的使命であるかのように満足だった転倒したのである。この「総結集」は、パートナーやある「日本のこと」が、総結集無期延滞という突然の志賀提携をめぐって分裂し、春日庄次郎氏らの統社同離脱を伴い、党名稱問題

社 労 同 の 結 成

頭役員大もめしながらも、七年にかけて共産主義も、労働者党など、諸グループのより、所持的党の結成へと到了。周知のようにこの党は七年を前後して分岐していく、統一した組織的機能と実体を形成していくことができないのだが、このようないきが一定に受け入れられる根拠としては六〇年代後半の世界的な激動の高揚の中で、それに応する主体的機能を、何とか手近につかみたいというあせりと、それを可能とするかに感じさせる一定の主体的高揚とが接觸される。この「総結集」に先立つ統一ブント（共産主義者同盟）の成立も、そのことを示す。このよ

うな合同の動きは、共労党結成後も少なく、七年を前にして、いわゆる左義構成の結集志向と、そぞ共労・統社内の活動家の一派を中心として画策されてくる。前組織に統一・共産同盟、それと社労同の四者の共同行動には明確にそのような志向が一部反映していたのである。このよう中で、総結集反対一社革東京臨時都委員会の中心を指し、前章に述べた「新しい党」輪を横拡に政治方針を提起し、政治組織の形成へと

話が前へいきすぎたが、社労が進んだのが社労同の基本的母体となつた労働運動現場の若い主体と、少數の共産主義者を中心とした労働者党であった。六七年一月二二日、東京都内の某所で結成された「総結集反対派」の中軸であった社革東京は、様々な内容を混在していた。(1)主導を通じての社会主義革命、官僚主義を根絶する新しい党・スター派の政治的拡散の中で非常に強いために、(2)社革結以来追求してきた基本路線である民主的革新を通じての社会主義革命、官僚主義を根絶する新しい党・スター派の政治的拡散の中で非常に強い前進の困難性を意識したり、いわば本物の政治組織建設への責任意識と熱意をはらんでいた。

「われわれの政治路線は、労働階級がたたかいと、これまでの共同行動をみ上げながらの結集へという方向を阻害する、等の理由から「総結集」には反対する社革東京の多数は自らの政治的・組織的方針の提起と実践を迫られたのである。この時、結集反対派の中には、必ずしも統一的な政治的・組織的蓄積がなされていたとはいえず、むしろ、組織内民主主義問題に対する部分、労働現場活動家集団の形成との連合を重視する部分、教員支部の多数にみられたような思想的革新を追求する部分等々に分岐し、急速に拡散していくのである。このよう中で、総結集反対一社革東京臨時都委員会の中心を指し、前章に述べた「新しい党」輪を横拡に政治方針を提起し、政治組織の形成へと

社 労 同 の 構 想

翼」(二号)

社労同のかかけた展望は、社革の事実上の死滅をのりこえるといふことできわめて全面的なものを収めたが、大まかにいえば、一、党理論における「市場の党」論、二、権力意志なき民主的改革論批判、三、国際路線批判の三點であった。それらがどのような情勢・任務意識として把握された

進んだのが社労同の基本的母体となつた労働運動現場の若い主体と、少數の共産主義者を中心とした労働者党であった。六七年一月二二日、東京都内の某所で結成された「総結集反対派」の中軸であった社革東京は、様々な内容を混在していた。(1)主導を通じての社会主義革命、官僚主義を根絶する新しい党・スター派の政治的拡散の中で非常に強い前進の困難性を意識したり、いわば本物の政治組織建設への責任意識と熱意をはらんでいた。

「われわれの政治路線は、労働階級がたたかいと、これまでの共同行動をみ上げながらの結集へという方向を阻害する、等の理由から「総結集」には反対する社革東京の多数は自らの政治的・組織的方針の提起と実践を迫られたのである。この時、結集反対派の中には、必ずしも統一的な政治的・組織的蓄積がなされていたとはいえず、むしろ、組織内民主主義問題に対する部分、労働現場活動家集団の形成との連合を重視する部分、教員支部の多数にみられたような思想的革新を追求する部分等々に分岐し、急速に拡散していくのである。このよう中で、総結集反対一社革東京臨時都委員会の中心を指し、前章に述べた「新しい党」輪を横拡に政治方針を提起し、政治組織の形成へと

している。とくに東洋の世界的規模での困難は、景気上昇がはじまっても微弱な時点でのは鉛筆で開拓の發展を可能にしている。それとともに、ベトナム戦争に日本的に表現される平和の極度の危機は、全人民的な反帝闘争の發展を必然化していく。……たゞ、現代資本主義の特徴は、ファシズムの方法に訴えるよりも、國家の全面的な介入と社会民主主義の全面的利用のもとに恐慌の發展を緩和しつつ、ついに一定の先制的な譲歩と予防措置によってプロレタリアートの要求と政敵を体制内に吸収しようとするところにあり、闘争は、長期の陣地戦を経由せざるえない」とし、世界帝国主義支配構造のアジアにおける支柱となつた日本帝国主義の支配の再編を、「基本的には保守的自らの民衆内に主流派対反主流派の政策交渉を自・社対抗で補足してきた政治構造がブルジョア多文化として分解・再編されつつあり、自然成長的反体制エネルギーを体制内に吸収する装置が複雑化・高度化しているところにある。このエネルギーの噴出を政治的危機にまで導くためには、議会の次元ではなく、社会とともに生産の原点の

次元での巨大な、孰うな努力を要すること……そこで革命主体の形成がすすめば、政治的運動は各党内部でこそもっとも進行していることからして、危機を下から創造する見通しは大きくなっていることも確認される。一九七〇年を危機への転換とするためにいま要求されているのは、「新しい統一左翼」へ向っての先導的・能動的な主体形成のエネルギーである」。年を危機への転換するためにいま要求されているのは、「新しい統一左翼」へ向っての先導的・能動的な主体形成のエネルギーである」と抱えて、特に、極めて大規模に展開されている、労働運動の右翼的再編に對決していくことが強調された。これらの対決は、結じて「物的的生産の原点（経営・学園）での大衆自治・自己権力の確立・大衆自身の「参加する民主主義」の実体の確立」として、生産権力から国家権力へと接近する社会主義的権力闘争として構想されるべきである」とし、世論は、指導委員会と運動委員会を中心的機構として設置し、指導委員会は機關紙誌の発行、イデオロギー討論集会、諸情報の集中と对外的連携関係などをを行い、運動委員会において労働運動・学生運動の方針の煮つめと実践・総括を行うということとした。そして、規約の中に、細胞の設置明記し、基幹的労働現場の中にこそそのヘゲモニーの中心として、工場内にあった、現場活動家と指導者部という二重性が、箇所を違ひながらも、そのるつぼ的統一を望む。

社 労 同 の 構 成

勢意識と構想に依つて。

しかし、社内反対派闘争の中で堅苦な政治的等質化と、何よりも政治組織を自ら抱っていくという

組織活動能力と形態を充分に形成していないなかたがからくる組織力の弱体は否めず、この事は、アキレス腱として存在した。この事は、同組合費の納入率の低さとともに残り、一貫して社労同のアキレス腱として存在した。この事は、一方では、労働者同盟員会として残り、一方では、労働運動委員会などを中心的に個別労働現場の現状分析から、労働運動の右翼的再編の情

報と必ずしも結びつかない現場大衆闘争にほんどの精力を注ぐる労働者同盟員との二重化を保持しつけたのである。

このようは組織状況を克服する道は、機関紙誌活動をまん中にねらう、機関紙誌活動をまん中にねらう、一方では、労働者同盟員会として残り、一方では、労働運動委員会などを中心的に個別労働現場の現状分析から、労働運動の右翼的再編の情

報と必ずしも結びつかない現場大衆闘争にほんどの精力を注ぐる労働者同盟員との二重化を保持しつけたのである。

このようは組織状況を克服する道は、機関紙誌活動をまん中にねらう、機関紙誌活動をまん中にねらう、一方では、労働者同盟員会として残り、一方では、労働運動委員会などを中心的に個別労働現場の現状分析から、労働運動の右翼的再編の情

社 労 同 の 展 開

このような困難にあって、社労同としての同組合組織生活の建設へと、その志向から、自らの労働現場で、あるいは方へへの批判とともに、行動を保護する条件をととのえるのではなく、大衆闘争ににおける共闘と、政治組織の討論と共同行動を保護する条件をととのえるの

このように、内に労働現場活動家の一部は、二つの方向から離れた社労同の一部のあり方への批判とともに、工場の党の形成を特に重視する情

きつけられてしまい、かかけた構想にかかるらず、財政活動を含めて、組織維持と理論的・組織的相手としての指導グループと、そ

れと必ずしも結びつかない現場大衆闘争にほんどの精力を注ぐる労働者同盟員との二重化を保持しつけたのである。

た。しかもその時、党の限界を明確にする努力が放棄されていた。

また六七年後半には情勢への対応

を重視して「広義構革派」の大同

団結（組織合団）への動きが共労

党・統社同を中心化し、共

業同を中心とする学生戦線の先行

的前進とも相俟って、それらへの

対応にともしても精力をさかれ

て、労働運動への組織的な勢力傾

注がれて不充分であったのであ

る。

こうじて、社労同は六〇年安保

闘争への主体的な高揚の時期を、

それへの即目的対応である「構革

派合同」的志向への批判を展開

し、大衆闘争の共同行動を提起し

がつ、六八夏の国際反戦集会を

主張的に担うという形で、革共

同・共産同系と機革系との共同行

動の突破口をつくり党派間統一行

動を実際にめしすすめた。

これらの政治行動はベトナム反

戦・侵略・内戦阻止・安保粉碎を中

軸としてたたかわれ、それは同時に

全国学園闘争の高揚と重なっ

ていた（これについては次章）。

この主体的組織態が反戦青年委

員会と、全共闘に代表されるもの

であった。そして社労同運動主体

は、共学・全共闘と、出版、国

公・教労・労働者福祉等の反戦・

戦線主体によって主要に体現され

ることになった。事態は、社労同

が主要に重視した、基幹労働原点

において「労働者権力・工場の

効率化するより、学生戦線

で全共闘・大学占拠として体現さ

れ、また労働戦線においては、構

造部からの反乱というよりも、

個的決起をバネとした街頭におけ

る、反戦・反帝の政治主体である

反戦青年委員会運動の高揚といふ

形であらわれた。この一見矛盾す

る現象に対し、労働戦線とりわけ

基幹産業部門・流通部門に著

にあられた、七〇年代日帝冷配

戦略をかけた再編攻撃——それは労

働組合運動の体制へゲモニーとし

ての包摵を不可欠の構成要素とす

ると、それへの既成革新勢力の

敗北の先鋭な表現としての反戦派

登場——という統一的把握は運動組

織戦術を重別反戦運動として追求

しこの統一的把握を失いたい主体

においては、七〇年をけさんで、

労働組合運動の全般的否定から組

合主義へと「再転換」した（そし

て同時に石川島播磨重工・東交な

いとする提案は、まさにプラン

の段階で停止してしまった）。

その後、東京近辺に偏在してい

る同朋組織の全国性を獲得してい

く一大突破として学生戦線を中

心に六八年春関西委員会が結成さ

れ、組織員の拡大が果されていく

が、総じて大衆闘争における戦線

の拡大が要求する総力量——思想

的・理論的・組織的一と主体的力

量の差が拡大していった。六九年

闘争はこのようない組織的危機の中

で醸かれたのである。

(1)

- 7 -

われわれの歩んだ道——社労同・青共委8年史——(3)

六〇年安保の後で

統社同の分裂のいきさつを述べた
中において、「東京における共青
青」ということがでてきた。

今はブント系諸派にいろいろ
「共青」があり、また毛派の「共
青」などもあるようだが、戰後自
身において、「共産主義青年同

盟」を名のる組織は仕事をともに
誕生した。社革の青年組織とし
て、また日共の民衆に対する階
級的青年組織（民青は始めから何

らの階級的組織ではない」として六二年創設された日本共産主義青年同盟がそれである。

これは、学生運動における全學連反主派と青年運動における民

青革新委員会の両者によって、過

渡的組織・青年運動革新委員会

を経る中で形成されていくわけだ

あるが、この過程については多く述べる紙数はない。ただ、学生

運動青年、農村青年の上流な結果

を伴った青年学生運動革新委員会が

そのままで共青に移行したのでは

なかつたといふことは、幾ぶんが

の想記されなくてはならない事実

である。いわば共青建設の雛形

は童頭部屋と終つてしまひたので

ある。脱落部分の続出する中で、

共青は全國組織として建設される

崩壊する共青

結局、共青として自立構立したのは、東京の学生（統合一派）と大阪の労働青年・学生（阪学大の派）にすぎなかった。しかし、前者は京都の学生連隊の上位に大きな位置を占め、その大衆的な動員力をもつて、大蔵法闘争をはじめとする闘争を先進的に展開した。大三年の共

(3) 社革一統合同分裂が青年学生レベルにもタチ割りに分散して、かなりの学生部分が共青に脱離していくこと

(2) 共青を指導すべき社革がすでにその能力がなく、唯一その全国性を活かして、共青の全国的運営を助けることなどが

(1) 離脱的にして大衆的な全青年の同盟体として、いわば共青準備会の存在として東京と大阪にそれぞれ別個に先駆的に自立確立していくこととなるのである。この原因について以下に三点に歸すことができるだろう。

（1）階級的にして大衆的な全青年の同盟体として、いわば共青準備会が当時のわが国の日本の發展状況の中では多分に困難であったこと

（2）共青を指導すべき社革がすでにその能力がなく、唯一その全国性を活かして、共青の全国的運営を助けることなどが

（3）社革一統合同分裂が青年学生レベルにもタチ割りに分散して、かなりの学生部分が共青に脱離していくこと

東京共青と社革都委員会とは概して不仲であり（社革学生支部と社革都委員会の間柄も同様）、かなりも完璧な質における組織指導は一貫して存在しなかつた。これに加えて、東京共青はついに確たる都委員会を形成しえなかつた（大阪共青は府委員会を形成）。各支部は分立しながら、主刀支部の教育大のまわりに寄り集まるという不健全な構造ができ上

り、前回に於て掲回のため尋ねたところにおいて、共青の「遺産」を手に入れようとした二つの陰謀が勧告出したのである。

その第一は前年大阪で急発展を遂げた民学同の大坂、東京にわたる大陰謀である。民学同のことに従事する大陰謀である。民学同はその種の合同問題に対する紙数を費すことは到底できないという非常な内部的な危機を東京共青はいたいでいたのであ

ることなく、いわば共青準備会の存在として東京と大阪にそれぞれ別個に先駆的に自立確立していくこととなるのである。この原因について以下に三点に歸すことができるだろう。

（1）階級的にして大衆的な全青年の同盟体として、いわば共青準備会の存在として東京と大阪にそれぞれ別個に先駆的に自立確立していくこととなるのである。この原因について以下に三点に歸すことができるだろう。

（2）共青を指導すべき社革がすでにその能力がなく、唯一その全国性を活かして、共青の全国的運営を助けることなどが

（3）社革一統合同分裂が青年学生レベルにもタチ割りに分散して、かなりの学生部分が共青に脱離していくこと

その一大事は六五年春におきた教育大文・研自治会選舉における共青の敗北、民青の勝利である。これは当時の学生運動全体にとっての大きな出来事であったが、とりわけ共青にとっては破壊的な力をもつてのしかからだ。共青の威信、理論、運動におけるヘゲモニー等々すべてのものがひとえにこの教育大の大衆的な運動力量に懲つていたばかりである。しかし、この危機存亡の時を迎えても、共青同盟員は一致団結せず、前面に出て挽回のため奔走するものは少數で、多くは分散したまま、個別に廢滅しつつあった。

ここにおいて、共青の「遺産」を手に入れようとした二つの陰謀が勧告出したのである。まず大阪共青は学生部分に対する合同結びがもたらかけられた。しかし、東京共青は合同対抗を行はず、この話は流れだ。後の社革一日本のことの合同問題に対しても同様であるが、東京共青、とりに教育大支部はこの種の合同問題に対しても合同結びがもたらかけられた。しかし、東京共青は合同対抗を行はず、この話は流れだ。後の社

に教育大に対して内部工作を行っていた。すでに秘密の民学同サークルが作られており、中には共青司員でありながら民学同の秘密同監督という者もいた。なんとその一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

しかし、この民学同サークルもメンバーが共青側に戻つたりして、支部として旗上げはしたが、ほとんど影響力をもらず、民学同監課は失敗に終つた。その後、ともかくも共青が田舎争を駆け抜け、六六年に入る頃、統社同の監課が動き始める。この時点において、現代の理論社にたどり着く安東「兵衛」とその弟子達は、凋落した共青にかわって、一挙に首都の機関紙学生運動の主導権を握り、廻団の運動と連携して、新三派連合「金事連」に对抗しうる勢力を形成せんともい

べいた。そのためにベトナム反戦抗議がつづられ、自治会共監がつづれていくわけであるが、それ一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

しかしながら、この民学同サークルもメンバーが共青側に戻つたりして、支部として旗上げはしたが、ほとんど影響力をもらず、民学同監課は失敗に終つた。その後、ともかくも共青が田舎争を駆け抜け、六六年に入る頃、統社同の監課が動き始める。この時点において、現代の理論

江戸わたら同志が担当し、慶応、井藤がつづられ、自治会共監がつづれていくわけであるが、それ一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

しかしながら、この民学同サークルもメンバーが共青側に戻つたりして、支部として旗上げはしたが、ほとんど影響力をもらず、民学同監課は失敗に終つた。その後、ともかくも共青が田舎争を駆け抜け、六六年に入る頃、統社同の監課が動き始める。この時点において、現代の理論

江戸わたら同志が担当し、慶応、井藤がつづられ、自治会共監がつづれていくわけであるが、それ一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

江戸わたら同志が担当し、慶応、井藤がつづられ、自治会共監がつづれていくわけであるが、それ一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

江戸わたら同志が担当し、慶応、井藤がつづられ、自治会共監がつづれていくわけであるが、それ一人は一時は共青支部委員会のキヤウツを「とめておいたのである。この工作は当時の衆議院議員志賀義雄の秘書」によってこなされていた。

共学同一創業の同志たち

共青再建の作業は一九六六年、当時の東京学生監修会（支部連絡会議的なもの）によって開始され

た「共青東京学生同盟員総会」（東京総）に始まる。

この総会の主幹者は慶應義塾の

社労同と共学同

共学同を発足させてはみたものの、それをとりまく状況はきびしく、組織的結着をつけた後の強硬の中での沈黙なムードが教育大支部をつづみこんでいた。後輩者の組織的対応という問題に一歩進んで、共学同の飛躍の芽がついでいる。『反戦共監』の中における統社同の右翼的方針（非核宣言云々）に対抗して緑のヘルメットが登場していく中で、改めて社労同が共学同（この時点ではまだ教育大支部、中大は大学革新運動委員会）をもろよに位置付けるの

争、といふ王子騒争に突入するまで、共学同の飛躍の芽がついでいる。『反戦共監』の中における統社同の右翼的方針（非核宣言云々）に対抗して緑のヘルメットが登場していく中で、改めて社労同が共学同（この時点ではまだ教育大支部、中大は大学革新運動委員会）をもろよに位置付けるの

旅学生運動の中には横断的な
動きの法政における旧統社同の統
一有志会と共青残党による法政
学生社会主義者同盟の結成、早稻
田における「早大フロント」の確
立（フロント的な形成）を評価し
て、共学同も教育大共学同とし、
将来の第一学生同盟の形成に備え
るという意見があった。それに対
して、共学同部分が断ち都委員会
を形成して打って出るべき」と主

張り、結局、都委員会（準）を発
足させることとなった。

中大では全自連以来の伝統的
下、共青の有力な支部が存在して
いたが、それが六五年に入つては
崩壊し、サークル段階での苦難
が続いていた。が、社労同結成に
際してはいち早く合流しすでに
社労同組織が確立して、その下で
大学革新運動委員会の活動が始
っていた。これが六八年三月、鶴山

阪共青は結局、社革一日本のこと
合間に乘つて共効党へ結集したわ
けたが、唯一の学生支部、阪学大
中の一部の同志は社労同へ合流
して、関西地方委員会をつくる。
が、共学同については意識的に関
西では組織されず、社労同に全力
投入することとなるのである。

全国学園闘争の中へ

反戦闘争を盛り抜く一方で、共
学同は学園闘争の爆発へ向けて徐
々に意識性を発揮し始めていた。
教育大の一九〇五年ともいべき
六七年夏の筑波ストライキ闘争
(敗北)、画期的な勝利をからと
った六八年冬の中大学園闘争は來
たるべき全国学園闘争への大きな
橋渡しとなつた。多分に過渡性を
有していたとしても、大学改革論

（大学の社会的位置の革新）で武
装された共学同はもとより全国学
園闘争の意義を意識化した潮流で
あつたろう。他党派はこの共学
同が一体いかなる性格の組織であ
るのかについて、なかなか明確な
観念をもてなかつたようと思われ
る。革マル派は共学同 中大支部

（八派の原基となる）がその傾
向を示していたわけであるが、學
生組織では、構改派のブロック
(自治会共闘)が存続して一種複
雑な様相を呈していた。

六八年春からの新学園闘争、學長
選舉、第波闘争の三段階びの運
動展開の中で、教育大文自治会が
三年ぶりに奪回されると、教育大
（複雑な内部事情をかかえる教育
大に比して、共学同として典型的

に登場していた）を表面的に觀察

決定によって、本館封鎖が執行さ
れ、文学部自治会闘争委員会が形
成される。以降、共学同の手によ
てさるものに全学闘争が結成され、日

本民衆の反革命と國のなら、八

ヶ月の大学占拠闘争が展開され

た。中大をはじめとしてその他の

各支部もそれぞれ学園闘争に突入

していく。さながら学園闘争の寵

児として共学同は急速に影響力を

広めていくことになるのである。

この他、六八、九年のこの時期に

は語るべきことが山ほどあるが、

全國学園闘争の後退期から政治決

戦へ向けて提起された「學園から

國家へ」の象徴的スローガンが共

学園の混迷の時代を招来するに及

ぶ。すべては党内闘争の助火の

中に投げこまれていくのである。

七〇〇年闘争の敗北と社労同の崩壊

われわれの歩んだ道——社労同——青共委8年史——(4)

全国全共闘と諸党派

「七〇年闘争」とは、いわゆる

六八・六九年の全国学園闘争であり、その最大のヤマ場が六九年の一・一八・一九東大安田講堂防衛であったというとば、今ありかえってみれば歴然たる事実である。

組織方針であった。

その下地は八月の国際反戦集会としてうたれていたが、学生戦線における構革派ブロック（自治会五共闘）には、四月の段階で革マル「全学連」の『原則的自治会運動路線』（フロント）が乗つていくという状況があり、まだ労働戦線においても統社同は解放派、革マル派等と共に地盤背婦協議の集会に参加していくところ構図が存在しており、社労同・

共学同の立場も危ういものがあった。しかししながら、諸党派の対応はこの現実に全く立ち遅れていたのである。一八・一九闘争の前哨戦とも言つべき六八年一月二二日の東大安田講堂前の全国学生総決集は、一〇・二一の騒乱譚を引き出した国際反戦闘争との関連で、それ以後の七〇年闘争への方向性を示したものであったが、諸党派はこうした認識を欠落していた。

社労同・共学同だけが、この時期に既に「全国学園共闘」の方針を打ち出していた。それは一方では統社同（フロント）の主導する自ら運動路線を克服し、他方では三派「全学連」の中核「全学連」、反帝「全学連」への分裂、あるいは反帝「全学連」らづかれた対抗派・M・J派連合への分裂という現実を止揚しうる唯一の

やはり、一・一八・一九の安田講堂防衛が諸党派をして学園闘争への積極性を引き出さしめていたと言えよう。中核派の「大学会議がもたらす八月に明大和泉校会において全国の代表者会議が開かれた。共学同関係では教育大全会闘、大阪学芸大全共闘等が参加した。

ことでの議論の内容は、既に多く秋期決戦を意識したものであり、例えばフロントの「安保金子共」の方針等、諸党派の眼は全く秋期決戦一本に注がれていた。そ

こでは学園闘争の後退局面に対する深刻な認識は全くなく、また各大学全共闘においても既に大学を追われ、個別に戦術展開することを安保粉碎・日帝打倒の砦に」

論、M・J派の「帝大解体・二重権力」論、あるいは解放派の「反産反戦」路線、フロントの「国大協路線粉碎」等、各派の学園闘争論が花を咲かせた。また実践的にも全国学園闘争の創出のために、京大闘争が工作されていったほどである。これには中大全共闘の一翼として共学同中大支部も参加している。

しかし、全国学園闘争は諸党派の意識性などには高揚していかず、むしろ東大安田講堂での敗北が、地すべり的な学園闘争の後退過程を生み出していくという結果となつたのである。一月には日本革マル派も含めた一大新左翼連合が成立したほどである。しかし、これによって七〇年闘争に向けた学生運動の路線が学園闘争を軸とするという点で諸党派の認識が統一したわけではなかった。例えれば六年正月早々に開かれた諸党派の一月闘争の戦術打ち合せ会においては、中核派は一・一九佐世保二周年闘争を考えていたくらいである。

こうしたなかで、やっと八派による展望が問われているという認識を所有していた。その点では、一うした学園闘争から「すり抜け」を合理化することなく、秋期決戦に向けた展望を切り開かんとした苦労を帯びた立場を表現していたと言えよう。

社労同・共学同は、六八・六九年全国学園闘争をいはば予見し、主要に中大・教育大闘争としてその展開に関わってきた。その中で大学全共闘の長期的な持続としてのみ意味を有していたのであり、それ自身は闘いの目的としては存在しなかった。

秋期決戦と共学同

社労同・共学同の「学園から国家への象徴的スローガン」は、こうした学園闘争から「すり抜け」を合理化することなく、秋期決戦に向けた展望を切り開かんとした苦労を帯びた立場を表現していると言えよう。

社労同・共学同は、六八・六九年全国学園闘争をいはば予見し、主要に中大・教育大闘争としてその展開に関わってきた。その中で大学全共闘の長期的な持続としてのみ意味を有していたのであり、それ自身は闘いの目的としては存在しなかった。

十一・一二集会は、へんじした複雑な党派関係を再編成していく契機となつたのである。一時は革マル派も含めた一大新左翼連合が成立したほどである。しかし、これによって七〇年闘争に向けた学生運動の路線が学園闘争を軸とするという点で諸党派の認識が統一したわけではなかった。例えれば六年正月早々に開かれた諸党派の一月闘争の戦術打ち合せ会においては、中核派は一・一九佐世保二周年闘争を考えていたくらいである。

こうしたなかで、やっと八派による展望が問われているという認識を所有していた。その点では、一うした学園闘争から「すり抜け」を合理化することなく、秋期決戦に向けた展望を切り開かんとした苦労を帯びた立場を表現していると言えよう。

社労同・共学同は、六八・六九年全国学園闘争をいはば予見し、主要に中大・教育大闘争としてその展開に関わってきた。その中で大学全共闘の長期的な持続としてのみ意味を有していたのであり、それ自身は闘いの目的としては存在しなかった。

た。社労同は、自らの立場を労働者権力派と規定し、この問題意識に対し「社会的権力闘争から政治権力闘争へ」とか「反帝政治闘争と構造闘争」等の概念で回答しようとしていたのであり、その學園闘論が「学園から国家への象徴的スローガン」だったのである。

事実、学園闘争を基盤として学生大衆の権力闘争への流動は、特に東大決戦の直後、六九年四・二八沖縄闘争において頂点となつたのである。しかし、四・二八闘争が敗北することによって、その可能性は失われていく。その意味では四・二八闘争の総括は困難なものがあった。特に「フント」はこの総括において、臨時革命政府、の樹立を囁く「赤軍」派が発生してしまはざめていた。

わが共学同の全面的指導下にあつた教育大全学闘も、八ヶ月にわたる大学占拠闘争を二月に解除された後には大衆的指導における生影を次第に弱めはじつた。こうした中で秋期決戦に向けた社労同・共学同の方針は今ひとつ鮮明性を欠いていた。スローガン的には内閣（政府）打倒スローガンを掲げたことは是非、戰術としては九月秋期決戦を前にして、七月に学生

学園決戦から十・十一月決戦へといふ方針、あるいは労働者政治拡張ストライキ戦術、そして諸政党がそれを分進合撃を押し進めている中で、いかに共闘体制を組むか、等の議論においてそれぞれ全く明確に位置づけられたというわけではなかった。

最終的には九月学園決戦が、

九・一七教育大奪還闘争、九・三〇日大闘争とも発生において、労働者政治拡張ストライキ運動が物にならず、具体的に提起しえないといふことになり、東大・共学同の問題についても

共学同論争へ

社労同（共学同）における党内論争は、こうした秋期決戦の敗北を、特に社労同・共学同の敗北として痛感した共学同の最も先進的な活動家の中からねじつた。

特に彼らは学園闘争の敗北をして、秋期決戦を少數でしか闘えなかつた点についても、深刻に考へざるを得なかつた。一方では

フロント、民学同がかつての構革派アーバン時代の野暮さから華麗なる転身を遂げて（注・統社同は

口学同・フロント・解放派の銀座闘争ブロックには組みしえないと、ここで単独行動を余儀なくされたのである。十・二・二闘争はかくして、共学同を主力とした「共産主義突撃隊」百名の部隊による「帝國主義権力中枢・中央実力闘争」として東京駅における闘争として展開された。もちろん、全国的な敗北であった。

十一月闘争も、この十月闘争における敗北構造を突破しえることなく、蒲田駅周辺におけるゲリラ的行動として敗化したのである。

こうして論争は共学同の段階において社労同対共学同として開始された。しかし、社労同においては党の二重化がはつきりしておらず、労働者同盟員のほとんどは大衆運動主義的であり、この党的危機にあたつても容易に動きえなかつたのである。有力な労働者同盟員であったO、Sは十一月闘争において逮捕されて獄中に在り、それも社労同の組織的危機を深めていた。

十一月に横見川の東大脇において開催された共学同全體會議は社労同崩壊への第一歩となつた。秋期決戦の総括と共学同論争の裏約を基調提起した都委員会は、教大支部を中心とした反対派の轟然たる追求によつて、過度させられていった。社労同メンバーは圧倒的少数派であり、その上組織性も弱く、全く対応しえなかつた。

この合宿において共学同は三分の二である云々）。また「学園から国家に」のスローガンに象徴的に示されていた問題意識をも清算していた（「反帝政治闘争の

た。そして、ついに共学同教大支部における文書として社労同の秋期決戦が大衆運動の総括であると批判し「党的立場からの怨嗟」が理論的にも生起してきた。これに対して都委員会も、また組織的問題としても社労同の組織的脆弱性は反対派の主張を根拠づけるものであった。

こうした中で反対派の活動は、はつきりと社労同の「党的革命」へと向ひられてきた。それでもなお社労同の組織的限界は克服されず、むしろ執行委員である教大同盟員の下が二月に逮捕されることによって全く困難な局面に突入したのである。

十一月に横見川の東大脇において開催された共学同全體會議は社労同崩壊への第一歩となつた。秋期決戦の総括と共学同論争の裏約を基調提起した都委員会は、教大支部を中心とした反対派の轟然たる追求によつて、過度させられていた。社労同メンバーは圧倒的少数派であり、その上組織性も弱く、全く対応しえなかつた。

この合宿において共学同は三分の二である云々）。また「学園から国家に」のスローガンに象徴的に示されていた問題意識をも清算していた（「反帝政治闘争の

派として法大、埼玉大、横国大の支那があった。しかし中間派は、その資金と共に社労同から組織的に脱離していった。ところが共産党

運動は学園闘争と共に発展し、学園闘争の敗北と共に崩壊したのである。

社労同の崩壊

そこで、七十一年十一月に開催された第八回中央委員会が、社労同の事実上終焉となつたのである。

八中委は共産同の「貯金部会議」において「謝罪」した部分が、社労同の「覺醒」を唱えて一括加入し、社労同執行委員会辞任

也、退席させた上で、除名していった。彼ら（後に「社労同」を名乗り、機関紙「赤焰」を発行する、赤旗、赤旗と呼ぶ）は、きたるべき春期闘争に打って一丸となって闘つたが、総括論争が継続されること、組織的統一性が乱されことを恐れたためであろう

が、この「除名」措置によって、彼らは自らの墓穴を掘つていたのである。

執行委員会は、当然のことであつたがこの決定を不服するひとほどでなかった。がといつて、逆に赤焰派がいわばクーデタ的組織破壊に對決しただけの組織性もなかつた。このため、八中委の事態をめぐる執行委員会派の総括は困難をきめた。

正直なところ、社労同創設時の主体は多く脱落し、既に存在しておらず、この時期に駆けつけてくる者もなく、また駆けつけてきた赤焰派発生問題としてあらわれて

が、この「除名」措置によって、彼らは自らの墓穴を掘つていたのである。

史生は、いわば必然的であったとも思はれて、總括されなければならぬ問題であった。國際總路線批判をかかげ、日本構革派の自己

超克をめざした社労同の出發が、現代の分歧し混迷するマルクス主義體系の中でいかなる位置を占めていくかについて全く不分明にし、たままで社会主義革新運動と日本共産党日本のこゝとの野合反対派の延長線上に存在しているからについて、その弱點が規定的ことのと認めねばならぬのである。

（M）

社労同分派闘争と青共委二年

われわれの歩んだ道——社労同～青共委8年史——5

社労同の

労働者同盟的限界とは

七〇年一二月は、六七年一二月何よりもの闘争を抱いた新左翼諸派の勢体、言い換えれば、新左翼革命運動の一頭座の年であるといわねばならない。

さて、わが社労同の崩壊（七〇年三月八中委での分裂）も、当然にもこのよしな新左翼諸派の解体説の一環であつて、決して社労同のみの特殊性に起因するものではなかつた。実際、諦争は、前回のべたように六九年秋期決戦の総括から社労同の路線自体につき

進み、かつ組織的根本的弱さ、裏返せば組織論の根本的不知に向けるまでのやうである。しかし、もし特殊性があるとすれば、それは諦争の立脚点を根本的に問うところの程度、より自分の根柢性に忠実であるにすぎない。

八中委直後から述べるよう

な分派闘争が開始されるまでは、なかなか、われわれはいの苦悶のなかから社労同の総括観点として（1）分岐したマルクス主義の現状におけるわれわれの運営した立場とは何か、（2）それにもとづく組織論とは何か、（3）二点を導き出した。それは、表面上の戦略・戦術

の相違では断じてなかった。つまり前者の視点からは、社労同が未だ体系的ではなかったたゞしの日本で唯一とりえた歴史主義的マルクス主義を軸として防衛・発展させたのが、それとも赤堀派のアントロポス的経済決定論的マルクス主義に屈するのかという共産主義者として最も根本的立場をかけた問題であったと同時に、何よりも社労同がこの点についての確固たる眞正の立場を定立しえなかつたといふことは社労同の労働者同盟の限界であった。他方、この限界は、最も端的に組織統一・組織活動論のレベルにあらわれた。「ペゴモニーの党」という理論的規定を与え、「労働者権力・工場の党」の実戦的スローガンをかけながら、現実的には反宣傳主義的分散主義、生産現場主義が組織をなしていった。しかも「構成主義の自己超越」が組織面で達成不能であったといふだけではなく、構成派・新左翼・純共产党に特徴的な世代交代による組織機能の崩壊という革命組織の崩壊が組織統一と組織活動と組織指導を決定的に失いていたため、組織的意志統一をほんとうに克服できなかった。

われわれは、以上の基本的統合の上に立って自ら社労同の労働者同盟的限界を止揚するべくあえて

社労同を捨て、ようやく七〇年一月末に青年共産主義者委員会を

結成したのである。

分派闘争から青共委結成へ

しかしながら現実の分派闘争は、このような理論的総括ほどではない。赤堀派のものでは、もちろんなかった。社労同機関を乗っ取った赤堀派は、七〇年四月に入ると反赤堀派の多数派を滅ぼし組織の完全化をねらって次々と攻撃をかけてきた。まず機関紙關係の諸手段を取、旧執行部の主要メンバーに対する監禁・テロ行為、同僚に対する恫喝、そしてついに四・二八闘争におけるわが共産同

高校生委員会の隊列に対する暴力

の六月初旬、赤堀派から送られた「新左翼への自己批判要求書」であった。この日即ち批判要求に反撃を加えるのただ一点において統一し、六・二三明治公園集会での赤堀派に対する單獨行動が敢行された。いわゆる「内部

・外部の政治闘争」が開始されたのである。その後、出獄同志の努力もあって反赤堀派による政治

的再結合と新たな組織を求める

ため、組織的意志統一をほんとうに克服していった。

四項目確認にもとづく社労同総括と新政治同盟をめざした八月全同

政治同盟結成準備委員会への結集と組織的努力が精力的になられて、四項目確認が結成されるが、これを幹事會と批判する「新左翼」編集委員会は、七・二

四、突如として四項目確認総括還元、赤堀派との革命的統一を骨子とした見解を発表、「結成準備委員会」自身を具体的な対象としたのである。かくて八・一の社労同の組織的性格を明確にしていった。而者の相異は、社労同総括の敵対化か（前者）、旧執行部→社労同「再建」か（後者）にあり、どちらも決定的ペグモニーをとりえなかった。

この対立を一時的に沈静させたのは六月初旬、赤堀派から送

られた「新左翼への自己批判要

書」である。この日即ち批判要

書によって担われたのである。これが「新左翼」派、圧倒的多数派たる共産派一したが、その伝統と革命的飛躍は、唯一、われわれ共産派によつて担われたのである。

「新左翼」派は、自ら解体・消滅への道をたどつたのである。もちろんでん、この道行きは、社労同総括とその裏側かつ決定的ポイントを

めできびしい組織的、主体的官能的影響に反響しつつ、いかに共産主義的政治同盟への飛躍をかねて入會・沖縄闘争にかかり、それが、八月以降、十二月総会までの共委の全組織的中心軸であった。八月末共委第二総会へ

に、その任務の重さの故にさわ

「曙光」四六号登場。社労同は、ここに「社労同新左翼委員会」として東京共産主義委員会と連絡して、新政治同盟結成を前提とした西側多數派は、ここに「社労同共産主義委員会」として東京共産主義委員会は、まま組織内圧迫のまま組織内圧迫化か（前者）、旧執行部→社労同「再建」か（後者）にあり、どちらも決定的ペグモニーをとりえなかった。この対立を一時的に沈静させたのは六月初旬、赤堀派から送られた「新左翼への自己批判要書」である。この日即ち批判要書によって担われたのである。これが「新左翼」派、圧倒的多数派たる共産派一したが、その伝統と革命的飛躍は、唯一、われわれ共産派によつて担われたのである。

「新左翼」派、圧倒的多数派たる共産派一したが、その伝統と革命的飛躍は、唯一、われわれ共産派によつて担われたのである。

「新左翼」派は、自ら解体・消滅への道をたどつたのである。もちろんでん、この道行きは、社労同総括とその裏側かつ決定的ポイントを

めできびしい組織的、主体的官能的影響に反響しつつ、いかに共産主義的政治同盟への飛躍をかねて入會・沖縄闘争にかかり、それが、八月以降、十二月総会までの共委の全組織的中心軸であった。八月末共委第二総会へ

に、その任務の重さの故にさわ

りと投げてたが故の当然の帰結であった。だが、逆にわが共委には、その任務の重さの故にさわ

「レーニン主義の新生」の旗の下に！

青年共産主義者委員会（青共委）がその綱領的軸心を確定し、本格的運動展開と組織整備にのり出したのは、七一年八月第二回総会であった。ところは、いせんとして赤堀派との対立が予想されたが、地方で「レーニン主義」の綱領がまとまつたのにすきなかつたからである。

赤堀派との対立は、いせんとして赤堀派との対立が予想されたが、地方で「レーニン主義」の綱領がまとまつたのにすきなかつたからである。

七一年に入り、完全に終焉した。彼らが組織的に解体したからである。われわれは、自らの分派論——武力衝突を主とする「内部ケバート」否定論に終りせることとなり、むしろ組織論——軍事論の徹底的追求を通じた「内部ケバート」の綱心は、「日本植民派の自己超越」を標榜理論・路線 자체を国際共産主義運動の総括として確定することによって果すことである。「新生」とは何か？それは、レーニン主義の普遍性自体の歴史的规定性を把握し認識するが故に、インターの右翼的要素としての構成部「バート」の行使となつたことの努力は四月以降開始された。相輪印にいえば、分派論争が「内部ケバート」の行使となつたことには、新左翼諸派の腐敗以外の何ものでもないが、その真因はより本質的な問題つまり組織主体を政治的革命主体として確立しなければならない。われわれ自身がいたこと、あるいは革命的軍事論の次からくる武力行使の限りと、いつ歴史的・主体的限界にあると書わなければならない。われわれ自身そのものを構成したのである、これらの組織的・軍事的限界

の克服を通して自らの責任をとりねばならない。

「いろいろな時期において、何故

「レーニン主義」なのか？われわれは答える。まさに歴史主義的マルクス主義の視点からレーニン主義を把握してこそ、レーニン主義をレーニンの個々の命題としてではなく、世界プロレタリアートが歴史上初めて獲得しつつ今日もその意義を失わない歴史と世界の認識から世界変革の戦略と主体の形成にいたる尾尾一貫した、全般的な、唯一の理論と実践の体系として確認できるのである。では

「新生」とは何か？それは、レーニン主義の普遍性の具体的な規定性を把握し認識するが故に、組織論と、そこにおける（党）組織建設との有機的関連構造を典型的に形成していくことが第一義的でなくてはならない。

われわれは、かくて第三回総会に立ってレーニン民族解放闘争論の視角からいかに確定するかじめにこそあつた。されば返還＝併合、沖縄人民の自決権やその行使に対する支持・擁護という基本的観点は、直ちに導かれる。日本プロレタリアートの任務が明確に課されるのである。われわれは、七一年一〇月沖縄戦争、なんづく沖縄同三戦士の國会内決起闘争を真摯に受けと

われわれは、この「新生レーニ

ン主義」の首尾一貫した体系の創出のために説いてともに、全新左翼一社労同のアキレスの腱たる組織（論）建設への決定的第一歩を踏み出した。「党」党建設、世界革命組織（チーザ）」に明らかなようだ。党主觀主義と無政府主義の兩傾向を批判し「階級のヘゲモニーの意識的表現者」「階級と文化化を媒介し、かつ階級を労働者権力へと導く能動的集団」（階級一共产党）労働者権力としての党綱を確定した。したがって

当然にもわれわれの任務は、拠点における労働者権力闘争の大衆的戦闘と、そこにおける（党）組織建設との有機的関連構造を典型的に形成していくことが第一義的でなくてはならない。

われわれは、かくて第三回総会に立って余命を保っていた「全国全共闘」が中心、第四インター「プロレタリアート化紛糾争」（これが一年後に分解するが）として余命を保っていた「全国全

本格的政治組織の建設へ

わが建設期は、ます七一年秋期冲縄戦への関わりから始まった。

毛沢東的「プロレタリアート化紛糾争」（これが一年後に分解するが）

め、かつこの裁判闘争を経てなかなかの前記の任務達成にもとづき、「沖縄人民自決支持・擁護」のスローガンをかげ、沖縄民決連帶委員会(連)運動を七三年四・二八以降推進してきた。

他方、労働運動・学生運動にも全力を傾注し、理論的準備とともに労農漁（闘農労動者・漁業者）共済運動において左翼組合主義を実現する主体構築をめざし、学生臨時運動を媒介に学生運動の声援を着々と前進させつつある。

このような運動の前途は、あらためてわが綱領一戰術のレベルで労働者権力一労働者権利闘争論を軸とした再構成ないし組織的構化を通りて、いざに共産世界の危機一政府危機の現局面において戦略方針の綱り上げは緊急の任務である。この運動の前進は、組織建設を迫ってきた。しかし問題は、決して単純でないといふが、日本共産主義運動一革命論争の根幹を揺する問題ですらある。

一言いえば、「党的現代的困難」という現状の認識と克服の方策が、まさに今、議見深に問われてゐるのである。七〇年闘争後のあつては、建設期は第二期全般の運動の退潮、運動主体の大

量的脱落、党派アレルギーという主体の状況は、日本の市民社会の成熟が重なることにより、党主導主義と無政府主義的傾向をますます両極へと割裂され、党観念および党への志向を一層稀薄化させている。われわれは、沖縄闘争の主体的課題を「日本全国と日本共産主義運動」の総括に求めるなかから、このような主体の時代の党建設はありえないことを自分の組織的任務とした。七二年期合宿のことである。新左翼統一青社労同の組織論欠如の克服は、このような主体の危機を明確に止揚げた。一方で歴史にさかさすことはできないであら。

以上の観点に立ってわれわれは、七三年二月第四総において本格的政治組織建設を決意し、書記局員専従から書記長専従へと歩を進めつつも、何よりも組織拡大とブルジョア市民社会を規定しかえ組織原理を積極的な組織活動テーゼへのとりくみを通して獲得しあつてはいる。建設期は第二期へと飛躍しつゝある。

すべての闘う同志諸君／新生レーニン主義の体系構築へ／共存世界一民族國家を撃つ労働者権力闘争の大膽な展開へ／ブルジ

わが青共委は、この先頭に立つ

編集後記

★青共委「曙光」編集委員会より、すべての革命的労働者・学生諸氏に「社労同・青共委八年史」をお送りいたします。

★「社労同」が青共委とつながっていることをはじめて知った方もおられるか、と思

います。そうです、七〇年のあの新左翼八

派統一戦線の先進的な一翼を担つた社会主義労働者同盟こそが、青共委の母胎であつたのです。青共委は社労同を突き抜けた共

産主義的な政治同盟として発足したのです。

◇社労同の結成と展開

「曙光」八四号

◇共青から共学同へ・苦闘の時代
「曙光」八六・八七合併号

◇七〇年闘争の敗北と社労同の崩壊
「曙光」八八・八九合併号

◇社労同分派闘争と青共委三年
「曙光」九〇号

誤植等については訂正しました。事実関係等について御指摘ありましたら、お寄せ下さい。

★現在「曙光」紙上では、この連載の後を

承けて、富士亜紀氏の「前史・日本共産主義運動の特質」が二回にわたつて掲載され

ています。その後は「日本の共産主義――

以上の年月にわたつて書き綴られています。

この決して短かくない期間において、私共、そしてわが国の共産主義運動にいかほどの

進歩があつたのでしょうか？ 嶄密に考え

てみなくてはいけないと思います。

★このパンフレットは青共委機関紙「曙光」紙上に五回にわたつて連載されたものをまとめたものです。

△六一年分裂と綱領反対派の混迷

△青共委「曙光」紙上では、この連載の後を

ヨア市民社会を規定しかえす政治で金精力を傾ける決意である。共に闘わん

組織一党建設を、もろてわが共産主義運動の第三期に勝利せよ

(T)

**われわれの歩んだ道——
社労同～青共委8年史**

編 集 青年共産主義者委員会
「曙光」編集委員会
発行日 1974年10月1日
発行所 フェニックス社
千代田区神田神保町2-48
協栄ビル 電話03(262)0306
定 價 100円